

『ダンシアッド』で描かれた 三文文士の出自

福 本 宰 之

序章

ポープ（Alexander Pope, 1688-1744）の『ダンシアッド』（*The Dunciad*）が三文文士風刺の記念碑的作品であることは、今さら言うまでもない。本論では、これまであまり取り上げられることのなかった、当時の会話文化と定期刊行物の台頭という観点から、そもそもなぜ18世紀初頭、三文文士が文壇において前景化してきたのか、という根本的な疑問について考察し、それと同時に一体彼らの何があれほど風刺詩人ポープを苛立たせたのか、という問題について論じることとする。

まず初めに、三文文士風刺自体はポープやスウィフト（Jonathan Swift, 1667-1745）の時代に突然出現してきたものではないということは改めて確認しておかねばならない。例えば OED (2nd edn.) によると、三文文士の代名詞とも言うべき “Grubstreet” という語は17世紀前半には既に使われていたし、ロジャーズ（Pat Rogers）は “Grubstreet” という通り名を、三文文士を表すメタファーとして確立させた作家として、17世紀の二人の詩人マーヴェル（Andrew Marvell, 1621-78）とオールダム（John Oldham, 1653-83）の名を挙げている。⁽¹⁾

しかしながら、ポープが『ダンシアッド』で念頭に置いているタイプの三文文士とは、前世紀の風刺詩人たちが描くものとは、若干違っている。前世紀の風刺詩人たちが、典型的な三文文士の有り様を「才能に恵まれないが故に名作が思い浮かばずペンを方手に呻吟する者」と描くのに対し、ポープは「才能に恵まれないにも拘わらず、平気で駄作を濫発する者」というイメージで描き出している。そしてそれ故にポープの筆は、三文文士たちの境遇を笑いものにするだけに留まらず、彼らの創作態度や文体上の瑕疵を暴くことにまで及んでい

る。そしてこの点がポウプの風刺を、彼以前の詩人たちのそれから際立たせている特徴であろう。

第1章 初期定期刊行物の文体

英国における定期刊行物の出現と、ポウプが『ダンシアッド』で風刺したタイプの三文文士の出現との間には、明らかに因果関係が存在している。1695年の特許検閲法の失効に伴い、定期刊行物隆盛の時代が訪れたことはよく知られている。一方、ポーター（Roy Porter）は *Enlightenment* という書物において、ほぼ同時期の1700年頃から、ポウプがイメージしていた「三文文士」という概念で括られるグループが文学界に姿を現した、と指摘している。その際、彼は「三文文士」という言葉は使わず、侮蔑的ニュアンスのより小さい「職業上の著者」（“author by profession”⁽³⁾）という表現を用いているが、これは明らかに gentleman-author としてのポウプがイメージしていた「三文文士」、「売文業者」である。つまり先ほど述べたように、1695年の特許検閲法の失効と「三文文士」という概念で括られるグループの出現は、時期的に重なるのである。さらに OED による「ありとあらゆる種類の書き仕事を引き受ける、文学界の雑役夫」（“a literary drudge, who hires himself out to do any and every kind of literary work”⁽⁴⁾）という意味での“hack”の最初の用例も1700年のものである。これは偶然の一致ではない。実は定期刊行物の隆盛と三文文士が目立ってきた時期が重なるのは、定期刊行物の寄稿者に求められた文体を考えれば、驚くには当たらない。定期刊行物の寄稿者には名文調の文体で書く能力が求められなかったからである。

18世紀初頭に定期刊行物で用いられた文体を象徴しているのが「おしゃべり人」（*The Tatler*）という定期刊行物のタイトルであろう。⁽⁵⁾『タトラー』の文体が、コーヒーハウス等での白熱した議論に基づくものであったことは、一つ一つの記事の冒頭にその発信源として当時実在のコーヒーハウスの名が記されていることから察せられる。以下に挙げるのは『タトラー』5号からの引用である。

... I am still within Rules, and trespass not as a Tatler any further than in an Incorrectness of Style, and writing in an Air of Common Speech.⁽⁶⁾

スティール (Richard Steele, 1672-1729) は、ここで自らの文体に関して「私は常に規則の枠内に留まっているし、「おしゃべり人」を名乗っている以上、文体が不適切で日常会話のような口調で書くのはしょうがないとしても、それ以外の点では決して逸脱することはない」と宣言している。そして『タトラー』204号でも同じように、「我々日刊誌の書き手は、他の作家よりも文体の面でおしゃべり口調に近くなる」(“We Writers of Diurnals are nearer in our Styles to that of common Talk than any other Writers,...”) と述べている。この二つの引用から窺えるように、スティールは、情報を書面で伝える際にそれが不適切であることを知りながら、確信犯的に会話調の文体を採用しているのである。そしてその結果、『タトラー』は絶大な人気を博した。引用はしていないが、ゲイ (John Gay, 1685-1732) は「(『タトラー』は) 他の全ての新聞を合わせたよりも多くの客を(コーヒーハウスに) 引き寄せた」

(“[*The Tatler*] had brought [the coffee-houses] more Customers than all their other News Papers put together.”) と証言している⁽⁸⁾。それ故に、『タトラー』終刊後もスティールの採った会話調文体という戦略は、定期刊行物の編集者たちにお手本として引き継がれた。彼らは自らの刊行物を *The Tory Tatler*, *The North Tatler*, *The Whisperer*, *The Growler*, *The Grumbler*, *The Prater* などと名付けたのである。「ささやく人」「ぶつぶつ言う人」「ぺちゃくちゃしゃべる人」などニュアンスは違うが、全て「しゃべる」「会話する」という行為から名付けられたものである。

この点を考え合わせると、スティールら初期の定期刊行物編集者たちが誌面に Isaac Bickerstaff や Mr. Spectator, Nestor Ironside といった架空のペルソナを登場させ、彼らの口を通して記事を語っているのも、首肯できる。

「対等こそ会話の命である」(“Equality is the Life of Conversation”) とは、『タトラー』におけるスティールのお気に入りの警句であり、225号と244号で謳われている。こうした仮面を被った話し手たちは、社会的地位の点でも知力の点でも、読者と「対等」な人物として提示され、誰でも参加できる開かれたおしゃべりの場を形成することに貢献しているのである。換言すれば、定期刊行物の編集者たちは、読者たちと親密なやり方で直に会話を交わすために、意識的に市井の人というポーズを取っているのである。

なぜそもそも、初期の定期刊行物の編集者たちは、文体としてこのような会話口調、おしゃべり口調を採用したのかと言うと、彼らは読者として、高度な読解能力を備えた人間を想定していなかったからである。スティールは『タト

ラー』の第1号の巻頭言で新聞記事が語られる相手を「知性が劣る人間」⁽¹¹⁾ (“Persons of... weak Intellects”) とはっきり断言している。当時、字が読めない人のためにコーヒーハウスなどで新聞の読み聞かせが行われていたことは、よく知られている。アディソン (Joseph Addison, 1672-1719) は『スペクテーター』 (The Spectator) 一部当たりの読者を20人と見積もっているが⁽¹²⁾、この読み聞かせを考慮に入れないと、「一部当たりの読者が20人」という計算は到底信用できないであろう。イタリア (Iona Italia) がブリューワー (John Brewer) の統計を引き合いに出して指摘しているように、1714年当時男性の識字率は45%しかなく、女性のそれは25%であった⁽¹⁴⁾。18世紀初頭、人々は未だ情報を得るのにチャップブックの挿絵か、ロンドンの通りに掲げられた絵入り広告に依存していたのである。こうした事情の下では、初期の定期刊行物の第一の機能が、手の込んだ見事な文体で読者を感服させることではなく、出来るだけ平易な言葉使いで、実用的なニュースや情報を提供することになるのは、自然な流れであろう。この点を証するものとして、初期の『タトラー』の人氣が、エッセーではなく事実を伝える戦争の記事に負っていたことを挙げることができる。スティールは『タトラー』18号において、ややおどけた調子で、平和の到来がニュースの書き手たちに及ぼす苦悩と、スペイン継承戦争終結後も読者の興味を繋ぎ止めるために彼らが考え出すであろう方策について、書き記している。事実、1713年にユトレヒト条約が締結され、スペイン継承戦争が終結したせいで、『ポスト・マン』 (The Post-Man) と『ポスト・ボーイ』 (The Post Boy) という当時の三大新聞の二つの売り上げは急落したのである⁽¹⁵⁾。

第2章 『ダンシアッド』における会話文化への風刺

さてこれまでのところで、初期の定期刊行物では比較的平易な文体が用いられてきたこと、そして、それは初期の定期刊行物が実用的な知識、情報の伝播をその主たる機能として担っていたが故の必然的な結果であること、を論じてきた。初期定期刊行物の書き手たちは、高雅な文体で書く能力を求められなかったのであり、それ故に、それらの刊行物は巷に溢れる三文文士の出自であるとポウプの目に映ったのである。『タトラー』『スペクテーター』の後を受けて、1715年に創刊された定期刊行物である『センサー』 (The Censor) は1717年に一冊の書物としてまとめられて出版されたが、以下に引用したのは、その編集者シオボルド (Lewis Theobald, 1688-1744ポウプによって3巻構成の『ダ

ンシアッド』において、自身が愚鈍の王に祭り上げられた人物) が付した序文の一節である。

That Period of Time may be well called the Age of Counsellors, when every Blockhead who could write his own Name attempted to inform and amuse the Publick.

ここでシオボルドは同時代を「助言者の時代」と定義し、「自分の名前さえ書ければ、どんな愚者でも（新聞に寄稿し）、大衆を教化し楽しませようとしている」と述べている。シオボルド自身はポウプの宿敵であったが、彼のこの認識は、ポウプを『ダンシアッド』執筆へと駆り立てた危機感に通じるものがある。

こうした当時の事情を踏まえると、三文文士風刺の記念碑的作品である『ダンシアッド』に定期刊行物や会話文化に対する揶揄が頻出していることは、注目に値する。例えば、第1巻冒頭で早速「詩と貧困の洞窟」(“The Cave of Poverty and Poetry” (I 34))⁽¹⁶⁾の多産さを評した「ここから生まれ出てくるのが、新聞、雑纂、瓦版、雑誌」(“Hence Journals, Medleys, Merc’ries, Magazines:” (I 42)) という一行があり、そこにポウプ自身が付した注には「これらはあらゆる惨めな駄文書きによって、毎週そして毎月世に送り出されている」(“These were thrown out weekly and monthly by every miserable scribler.”) と説明されている。一般には見落とされがちだが、この一行に始まり、『ダンシアッド』において、ポウプが定期刊行物や定期刊行物に携わった作家を揶揄した箇所は数多く見られる。ここで附言しておかねばならないのは、初期の定期刊行物で用いられた文体が、全てポウプの悪口から窺われる程に、低級なものではなかったという点である。特に、散文の大家であるスティールやアディソン (Joseph Addison, 1672-1719) によって書かれた『タトラー』や『スペクテーター』に関しては、ポウプの評言は当てはまらないであろう。むしろ、規範的文法からの逸脱という点では、デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の『レビュー』(The Review) 誌の方が顕著である。

つまり『ダンシアッド』におけるポウプの狙いは、定期刊行物で用いられる文体を嘲ることではない。彼自身、定期刊行物に幾つか記事を寄稿しているし、『批評論』(An Essay on Criticism) が『スペクテーター』誌上でアディソンに激賞されたことが、ポウプが文壇で注目を浴びるきっかけとなったことは

よく知られている。また、同じく初期の作品である『メサイア』(Messiah)が最初に公刊されたのも『スペクテーター』誌上であった。ポウプの狙いは、作家としての資質がなくても、誰でも気軽に書くことができる開かれた場所を提供する、定期刊行物というメディアの形態自体に潜む危険性を訴えることであった。そしてポウプにとっては一層腹立たしかったであろうが、定期刊行物が、誰でも書くことができる開かれた場を提供する、つまり三文文士養成所として機能することは定期刊行物の編集者自身も容認していたのである。以下は『ガーディアン』(The Guardian) 98号からの引用である。

It is not therefore the least Use of this my Paper, that it gives a timorous Writer, and such is every good one, an Opportunity of putting his Abilities to the Proof, and of sounding the Publick before he launches into it. For this Reason I look upon my Paper as a kind of Nursery for Authors,⁽¹⁸⁾ (underlines added)

ここでスティールは「それ故に、本誌の小さからぬ効用とは、臆病な書き手に、そして優れた書き手とは大方そういうものなのだが、自らの実力を試し、世間の荒波に漕ぎ出す前にその深さを調べてみる機会を提供することである。この理由から、私は本誌を作家たちの養成所の一種と見なすのである」とはっきり宣言している。同じように1716年に創刊された定期刊行物『ミストの週刊ジャーナル』(Mist's Weekly Journal)においてミスト(Nathaniel Mist, d. 1737)は「慎ましき故に、本誌は弓に過ぎず、文筆業界に漕ぎ出す者は皆、誰に憚ることなく本誌で腕試しして差し支えない」(“On Account of Modesty, his Paper is a Bow, with which all Adventurers in the Writing World, may safely try their Strength.”)⁽¹⁹⁾と述べている。上の『ガーディアン』98号からの引用と同様に、ここでもまた定期刊行物が三文文士の出自となりうる可能性が仄めかされている。ポウプは、ある意味「メディアこそメッセージである」⁽²⁰⁾というマクルーハン(Marshall McLuhan)と同じ考えを共有していたとも言える。『ダンシアッド』において、ポウプは定期刊行物の存在そのものを否定している訳ではなく、むしろその文体を通して誰でも気軽に書くことできる開かれた場所を提供するという、マス・メディアとしての形態の方に危機感を覚えていたのである。

『ダンシアッド』における会話文化に対する嘲笑は、一読気づきにくいが、

実はこの詩の冒頭部分での場面設定において早くもうかがえる。

In eldest time, e'er mortals writ or read,
.....
Dulness o'er all possess'd her ancient right,
(I 9-11)

1行目の「人が読み書きする前の太古の時代」とは、すなわち「話す（しゃべる）ことしかできなかった時代」という意味に他ならない。そしてその古の支配こそ愚鈍の女神が再来を画策するものであり（“Still her old Empire to restore she tries,” (I 17)), かつ現にこの詩の末尾で再来する（“Lo! thy dread Empire, CHAOS! is restor'd;” (IV 653)) ものなのである。このように『ダンシアッド』の冒頭ではっきりと、ポウプは同時代の愚物たちを話す能力しかない、と切り捨てているのである。そしてポウプの会話文化に対する嘲笑は、『ダンシアッド』のテキストに付された、読み手を圧倒するような、夥しい量の擬注に込められた意義に光を当ててくれる。例として一つ挙げておく。

The DUNCIAD, sic MS. It may well be disputed whether this be a right reading: Ought it not rather to be spelled *Dunceiad*, as the Etymology evidently demands? *Dunce* with an *e*, therefore *Dunceiad* with an *e*... THEOBALD.

This is surely a slip in the learned author of the foregoing note; there having been since produced by an accurate Antiquary, an *Autograph of Shakspeare* himself, whereby it appears that he spelled his own name without the first *e*... BENTL.

It is to be noted, that this great Critic also has omitted one circumstance; which is, that the Inscription with the Name of Shakspeare was intended to be placed on the Marble Scroll... ANON.

Though I have as just a value for the letter *E*,... and the same affection for the Name of this Poem, as any Critic for that of his Author;... SCRIBLERUS.

これは『ダンシアッド』の第一巻冒頭に付された注で、作品のタイトルの正し

いスペルについて解説している箇所である。長い引用のように見えるが、実際はかなり縮約したもので、これでも実物の四分の一ほどの長さである。ポウプは1728年に初めて『ダンシアッド』を出版した後、作品中の謎めいた言及や伏せ字を解き明かす義務を感じ、翌29年に合注版『ダンシアッド』を出した。その中でポウプは詩の本文に係るコメントを様々な批評家たちから虚実交ぜにして集め、上の引用のように、それらを注釈として署名付きで載せたのである。ここでの引用に関して言うと、コメントの主は上からシオボルド、ベントレー (Richard Bentley, 1662-1742)、匿名氏 (anonymous)、スクリブレルスとなる。このうちベントレーのコメントの一行目にある「この前にある注釈の学識豊かな書き手」(“the learned author of the foregoing note”)とは、シオボルドのことを指している。さらに次の「匿名氏」のコメント一行目にある「この偉大な批評家」(“this great Critic”)とは、直前のベントレーを指す。この点から知られるように、ここでは四人のコメントが互いにばらばらに紹介されているのではなく、あたかも議論の現場に居合わせた速記者がその場の話の流れを忠実に再現しているような体裁をとっているのである。『ダンシアッド』に付された多くの擬注がそうであるように、この注に関しても“e”というアルファベット一文字をめぐる瑣末な問題を扱う冗長な注釈を持ち出すことにより、ポウプは学者たちの銜学ぶりを嘲笑している、というのがこれまでの定説であった。しかしながら、論者は100%その説に同意するものではない。この注でポウプが暴いているのは、シオボルドが喝破したように、「自分の名前さえ書ければ、どんな愚者でも、大衆を教化し楽しませようとしている」同時代の公共圏の有り様なのだ。この引用で描かれた『ダンシアッド』のテキストの欄外で繰り広げられている、重箱の隅をつつくような議論とその結果としての饒舌さは、同時代のロンドンのコーヒーハウスでの丁々発止としたおしゃべりや議論を忠実に再現したものに他ならないのである。

そして、おそらくポププのこの意図がもっと明確に表れているのが、『ダンシアッド』に添えられた附録記事の一つで、以下に引用した「作家たちの証言」(“Testimonies of Authors”)であろう。

... beginning with his ESSAY on CRITICISM, of which hear first the most ancient of Critics,

Mr. JOHN DENNIS.

“His percepts are false or trivial, or both; his thoughts are crude

and abortive, his expressions absurd, his numbers harsh and unmusical, his rhymes trivial and common;—...” No less peremptory is the censure of our hypercritical Historian

Mr. OLDMIXON.

“I dare not say any thing of the Essay on Criticism in verse; but if any more curious reader has discovered in it something *new*..., I should be very glad to have the benefit of the discovery.”

He is followed (as in fame, so in judgment) by the modest and simple-minded

Mr. LEONARD WELSTED;

Who, out of great respect to our poet not naming him, doth yet glance at his Essay,...: “As to the numerous treatises, essays, arts, etc. both in verse and prose, that have been written...”

To all which great authorities, we can only oppose that of

Mr. ADDISON.

“The Art of Criticism (saith he) which was published some months since, is a master-piece in its kind...⁽²¹⁾”

その名の通り、様々な作家たちが、作者ポウプの作品や性質について、順番に証言するというものである。これに関しても従来は、文学テキストの学術版に添えられた典型的な研究資料のパロディーとして片付けられ、その本当の狙いについて深く考察されることはなかったが、この「作家たちの証言」が担う象徴性は意外と大きいのではないだろうか。先に述べたように、この中でポウプはスクリブレルスの仮面を被って、本文の作者である自分自身の性格や作品に関する、様々な作家たち（その多くが『ダンシアッド』本文で取り上げられている愚物である）の見解を順番に紹介している。そしてその多くが、実際に同時代の定期刊行物から引かれたものであった。例えば、末尾の2行に『批評論』についてのコメントが載っている。先ほどアディソンが、『スペクテーター』誌上で『批評論』を称賛したことに触れたが、これはまさにその箇所（1711年12月20日付けの『スペクテーター』第253号）の記事の文言を載せたものである。ここも先の擬注の場合と同じで、かなり短くして引用してあるが、実際はこの4人の発言だけでもこの10倍くらいの長さである。さらにこの引用に関して、注目すべきは作家たちの証言が引用符付きで直接話法で引かれてい

る点である。また、引用の真ん中辺りの「これを受けて発言したのが、控え目で邪心のないレナード・ウェルステッド氏である」(“He is followed by the modest and simple-minded Mr. LEONARD WELSTED”)とか、下から4行目の「かくも偉大な権威に対抗するにはアディソン氏のそれを持ち出すしかない」(“To all which great authorities, we can only oppose that of Mr. ADDISON”)という繋ぎ言葉にも注意が必要だろう。つまりこの記事全体が、先の擬注の場合と同じく、議論の現場に居合わせた者が、その場でやりとりや雰囲気感を忠実に再現した現場中継のような体裁をとっているのである。言い換えれば、ここに記録されているのは、デニス(John Dennis, 1657-1734)やオールドミクソン(John Oldmixon, 1673-1742)らが書き残したものではなく、その発言なのである。しかもこの引用だけでは分からないが、擬注の場合と違って、「作家たちの証言」では、同じ作家が間を置いて複数回発言しているのである。先ほど実際はこの10倍くらいの長さだと述べたが、デニスやオールドミクソンやウェルステッド(Leonard Welsted, 1688-1747)らはこの引用箇所の後にも何度か登場して、その度毎に長広舌を揮うのである。つまり彼らが口角泡を飛ばしつつ議論を闘わせている様子が、先の擬注よりも、さらに迫真性を帯びて再現されているのである。またポウプが彼らの饒舌さに焦点を合わせていることは、引用1行目の「聞け」(“hear”)という動詞に図らずも表れている、とも言えるだろう。

そして耳を覆いたくなるような彼らのこうした饒舌さを嘲っているのが、『ダンシアッド』第2巻で描かれている騒音競争なのだ。そこでは「我が息子たちよ、騒音の素晴らしい力を学ぶがよい」(“...learn, my sons, the wondrous pow'r of Noise.” (II 222))という愚鈍の女神の呼びかけに応じて集まった参加者たちが、各自大声でがなり立て始める。

Now thousand tongues are heard in one loud din:
The Monkey-mimics rush discordant in;
‘Twas chatt’ring, grinning, mouthing, jabb’ring all,
(II 235-37)

繰り返しになるが、これは先に引用した擬注や「作家たちの証言」で描かれた、愚物達が白熱した議論を展開する様子を嘲ったものなのである。そしてこの競争で勝利を得たブラックモア(Richard Blackmore, 1654-1729)もまた1713

年に『レイ・モンク』(*The Lay Monk*)という定期刊行物を始めた人物であった。

またポープは『ダンシアッド』に先だって、『詩における沈降法について』という、同じように三文文士を笑い物にした作品を発表しているが、その中の「くだけた文体について」(“The PERT Style”)と題された第12章で、「この文体は機知において下劣な者に似つかわしい」(“This does... become the low in wit,...”)と断った上で、「タキトゥス(Publius Cornelius Tacitus, c. 56-c.100)がコーヒーハウスの政治家のように話し、ヨセフス(Flavius Josephus, 37?-100)が『ブリティッシュ・ガゼッティア』(*The British Gazetteer*)のように語るのは、この文体の持つ力によるものなのだ」(“It is by virtue of this Style that Tacitus talks like a Coffee-House Politician, Josephus like the British Gazetteer,...”⁽²²⁾)と述べ、会話文化の興隆が文学テクニストに及ぼす悪影響について言及している。

第3章 ジョンソンが見た定期刊行物

さて、これまでポープが生きた時代に定期刊行物が興隆し、その結果として会話文化が書き言葉の領域をも侵犯し始めたことに対する、彼の『ダンシアッド』における苛立ちを検証してきた。この点をさらに浮き彫りにするために、以下ではポープが看取した定期刊行物の有り様とは、およそ対照的な理想を定期刊行物に抱いていたと言うべきジョンソン(Samuel Johnson, 1709-84)の事例について検証してみる。ここでジョンソンの例を持ち出す理由は、彼こそ、自身定期刊行物を手がけた人間として、初期定期刊行物における会話調の文体が孕む功罪を敏感に感じ取っていた人物だからである。いきなり結論めいたことを言うと、ジョンソンが手がけた定期刊行物は、アディソンの『スペクテーター』をお手本としているものの、彼がそこで用いた文体は初期定期刊行物作家たちのそれとは大きく異なっている。但し、ジョンソンの文体を綿密に分析することは、論者の手に余るものであり、かつ本論の主旨からも外れることになろう。ここではジョンソンが定期刊行物において、会話調の文体と対比されるべき、より難解で非日常的な言葉を頻繁に用いていることだけに注目する。キャンベル(Archibald Campbell, 1726?-1780)やバロウズ(Robert Burrowes, 生没年不詳)といったジョンソンの同時代人たちも、既に彼のこの特性に言及している。それが以下の2つの引用である。

J----n.

Deject then exaggeratory obloquy below the horizon of your prospects, without the servility of adulation afford openness of ears, sedulity of thoughts, and stability of attention. But above all expulse hereditary aggregates and agglomerated asperities which may obumbrate your intellectual luminaries with the clouds of obscurity, or obthurate the porches of your intelligence with the adscititious excrement of critical malevolence.

Critick.

Being boldly, my good friend, there are neither agglomerated asperities nor hereditary aggregates about me.

J----n.

Consider well how I have conglomerated this atchievement of erudition, the insinuation of its exordial sentences, the selection of its diction, and resplendency of its sentiment⁽²³⁾.

Misocapelus tells of his “officinal state, adhensions of trade, and ambulatory projects;” and Hypertatus describes the “flaccid sides of a foot-ball swelling out into stiffness and extension,” and talks of “concentration of understanding, barometrical pneumatology,” and “tenuity of a defecated air.” In such writings the hand of the master must be immediately perceived; the existence of the imaginary correspondents cannot even for a moment be believed, and the Rambler stands convicted of an ineffectual and unnecessary attempt to raise his own consequence by forging letters to himself.⁽²⁴⁾ (underlines added)

最初のキャンベルからの引用では、ジョンソン (J----n) と批評家が問答を交わすという架空の設定になっており、難解な単語を多用するジョンソンに対し、批評家が「失礼ながら、我が友よ」以下皮肉を言うと、さらにジョンソンが大仰な言葉使いで応えるという趣向が凝らされている。2つ目のパロウズからの引用でも、『ランブラー』(*The Rambler*) 誌に典型的な大仰な表現が披露された後、「そのような書き物においては、達人の筆によるものということが、

すぐにばれてしまうに違いない。ありもしない投稿者がいたなどとは一瞬たりとも信じてもらえない。『ランブラー』誌は自分に宛てに書いた投稿をでっち挙げることで、自身の値打ちを引き上げるという、上手く行くはずもない余計な策を弄したという非難の矢面に立たされることになる」とコメントされている。

そしてジョンソン自身もこうした、およそ会話口調とはほど遠い、難解語を差し挟む自らの文体の特徴を自覚していた。彼は『アイドラー』(*The Idler*) 70号で「…言葉とはそれを理解しない人々にとってのみ難解となるのだ…全ての作家が全ての読者に向けて書くのではない。多くの疑問は読み書きができない類の人々にとっては、議論しても興味も沸かないし、楽しいはずもない…そして皆の役に立つ多くの話題は、その本が博学な者か無学な者に向けて書かれるかに応じて、違うやり方で扱われるだろう。」(“... words are only hard to those who do not understand them,... Every author does not write for every reader; many questions are such as the illiterate part of mankind can have neither interest nor pleasure in discussing,... and many subjects of general use may be treated in a different manner, as the book is intended for the learned or the ignorant.”⁽²⁵⁾)と述べているのである。このように、難解な単語や非日常的な言葉の使用に、ジョンソン自身が自覚的であったとすれば、アディソンに対する以下のようなジョンソンの評価も全く当然のものであった、と言えるのではないだろうか。

It was apparently his [Addison's] principal endeavour to avoid all harshness and severity of diction; he is therefore sometimes verbose in his transitions and connections, and sometimes descends too much to the language of conversation;⁽²⁶⁾... (下線は論者)

ここで注目すべきはジョンソンが、アディソンの「饒舌さ」(“verbose”)と、その「会話のような言葉使い」(“the language of conversation”)を結びつけている点である。つまりジョンソンの分析によると、アディソンは難解な語をより平易な語を用いて説明的に言い換えるので、言葉数が多くならざるを得ないのであり、結果としてその文体は余りにも会話調に近くなるのである。そしてこれが、既に述べたように、彼の『スペクテーター』を含む初期定期刊行物が秘めた「誰でも気軽に書くことできる開かれた場所を提供する」という機

能と関連しているのである。ただしここで注意しておかねばならないのは、ジョンソンはアディソンの平易な言葉を用いた会話口調を決して批判している訳ではないということである。もう一度改めて『アイドラー』70号でのジョンソンの言葉を振り返ると、先ほどはジョンソン自身、自ら難解語を用いていることを自覚していた、という文脈でこの引用を持ち出したが、「全ての作家が全ての読者に向けて書くのではない」とか「皆の役に立つ多くの話題は、その本が博学な者か無学な者に向けて書かれるかに応じて、違うやり方で扱われるだろう」という言葉からうかがえるように、ジョンソンは、読者の理解力に応じて文体も変えるべきだという立場を取るのである。従ってアディソンの文体については、それはそれで評価しているのである。それを証すのが以下の引用である。

[Addison] ... presented knowledge in the most alluring form, not lofty and austere, but accessible and familiar... An instructor like Addison was now wanting, whose remarks being superficial might be easily understood, and being just might prepare the mind for more attainments.⁽²⁷⁾

まず前半では「(アディソン) は知識をこの上なく魅力的な形で提示したのだ。崇高で厳めしい形ではなく、理解し易く親しみの持てる形で」と述べた上で、「アディソンのような指導者が、その時求められていた。彼の見解は浅薄であるが故に容易く理解されるだろうし、正当であるが故にさらなる学識に向けて知性を整えるであろう」と結んでいる。

しかしながらこれはあくまで、ジョンソンの言い分であって、やはり『スペクテーター』の生気溢れた、砕けた文体に慣れていたジョンソンの同時代の人々は、『ランブラー』の荘重な文体には違和感を覚えたのである。例えばドレイク (Nathan Drake, 1766-1836) は「大衆は、『スペクテーター』のページ上で文体の大きいなる多様性、人を虜にする陽気なふるまい、絶え間ない話題の移り変わりに慣れていた。それ故に、教訓的な『ランブラー』の荘重で威厳に満ちた調子を味わえるようになるのは容易ではなかった」(“The public had been accustomed, in the pages of the Spectator, to great variety of style, to a fascinating gaiety of manner, and to a perpetual interchange of topic, and it was not therefore hastily taught to relish the solemn and

majestic tone of the perceptive Rambler.”⁽²⁸⁾)と指摘しているし、先に引用で名前を出したパロウズも、アディソンを根拠として、ジョンソンのこの文体上の特性を定期刊行物に相応しくないものと断言し、その理由として「(定期刊行物の記事の)自ら謳う目的が風習一般の改善である以上、主題同様にその文体も、あらゆる理解力のレベルに合わせるべきである」(“... as their professed intent is the improvement of general manners, their stile, as well as their subjects, should be levelled to understandings of every description.”)⁽²⁹⁾)と述べている。

さて以上のように、ジョンソンを並置することにより、初期定期刊行物が有していただけた、会話調の文体という特徴は一層浮き彫りにされる。そして既に述べたように、古典語の知識や作家としての素養が無くても気軽に書ける開かれた場をそれらが提供した故に、ポウプのような風刺作家には初期定期刊行物が三文文士の出自と映ったのである。

第4章 定期刊行物をめぐるもう一つの事情

さて文体以外に、三文文士の出自と深い関わりを持つ側面が定期刊行物にはあった。すなわち毎号の発刊期日が短い間隔で定期的にやって来るという事情である。期日に間に合わせ、定期的に発刊することは、今も昔も定期刊行物の編集者にとって、最も大切でありかつ頭の痛い仕事であろう。例えば先に名前を挙げた『センサー』の編集者であるシオボルドも、『センサー』最終号においてこれまでの苦労を一頻り述べ立てた後、短い間隔で次々に襲ってくる発刊期日について、

To all this, I may add that intolerable Fatigue of having a Printer's Devil still at my Elbow, and the Necessity of supplying the Press in Time, whether my Matter were ready or no, tho' my Invention were never so dull, and I in never so bad a Humour to prosecute any Subjects.⁽³⁰⁾

と述べている。そしてこの引用文中に見られる「書くべきネタが手元にあろうがなかろうが、締め切りに間に合うよう印刷屋に原稿を渡さねばならない義務」を果たすため、創刊後間もない時期の『タトラー』でも、スティールは適当な記事が不足していた時、明らかに埋め草を使っている。例えば35号では

『ハムレット』(Hamlet) から50行を丸々引用し、さらに末尾では“trix”で終わる名前の意味なく長い一覧を載せている。また39号では、「決闘」という彼のお気に入りの話題について、全体のほぼ5分の3を占める非常に長い対話を一語一句も省くことなく他から引用し、さらに42号ではアディソンは、滑稽なほど詳細なドルリーレーン劇場の芝居道具目録を長々と掲載した上で、直後でこれが埋め草であり、西風が吹いて国外から適切なニュースが届かなかった場合、どの新聞でも用いている便法であることを認めている。⁽³¹⁾

このように、定期刊行物編集者たちに表に現れない労苦を課した、期日までに所定の見数を埋めて、きちんとした長さの刊行物を出すという使命は、他方で書く側にも、どのようなトピックであっても頼まれれば即座に記事をでっち上げるという能力を求めることとなった。そしてこの能力こそが『ダンシアッド』において、三文文士が三文文士たり得る資格要件とみなされているものであった。例えば4巻本『ダンシアッド』の附録記事の一つ「桂冠詩人について」(“Of the Poet of Laureate”)において、ポープは、桂冠詩人の資質について「…準備なしに詩を作り、必要とあらば数限りなく生み出すことができないなければならない」(“... he must be able to make verses *extempore*, and to pour forth innumerable if requir'd.”)と皮肉を込めて述べている。ポープがここで桂冠詩人の資質に言及しているのは、無論『ダンシアッド』で愚鈍の王たるシバー(Colley Cibber, 1671-1757)が、4巻本『ダンシアッド』が出た当時、桂冠詩人の任にあったからである。そして、シバー自身も、1743年に出了た作者不詳の冊子において、王室の慶弔時において詩作を義務づけられた桂冠詩人としての自らの境遇について「同じ話題について24回」(“four and twenty times upon the same subjects”)書かねばならなかった旨、うんざりといった体で告白している。⁽³³⁾一方ポープの創作に対する信条については、以下のジョンソンのポープ評が参考になる。

..., his effusions were always voluntary, and his subjects chosen by himself. His independence secured him from drudging at a task, and labouring upon a barren topick: he never exchanged praise for money,... He suffered coronations and royal marriages to pass with-
out a song,...⁽³⁴⁾

つまり gentleman-author としてのポープにとって「詩作意欲とは常に自発的

に沸くもの」(“his effusions were always voluntary”)であって、「戴冠式や宮廷での結婚式」(“coronations and royal marriages”)の際に「必要とあらば数限りなく生み出す」ものではなかったのである。物を書くという行為について、謂わば職人氣質のようなものを奉じていたポウプにとって、短い期間で原稿提出の締め切りがやって来る—多くの場合週3回、日刊誌であれば毎日—定期刊行物という出版形態もまた、それらが三文文士の出自と映った理由であった。

ところで、この「…準備なしに詩を作り、必要とあらば数限りなく生み出すことができなければならない」という桂冠詩人の職務を槍玉に挙げた背景には、単に桂冠詩人というポストやシバー個人を狙い撃ちした風刺というだけでは、片づけられないもっと大きな時代の風潮が横たわっている。その風潮とは「作家たちが書いた物の質ではなく量に応じて賃金が支払われていた」という、当時の慣行である。以下の2つの引用はその点を証してくれる。

Read all the *Prefaces of Dryden*,
For these our Criticks much confide in,
(Tho' meerly writ at first for filling
To raise the Volume's Price, a Shilling.
(*On Poetry: A Rhapsody*, 251-54.)⁽³⁵⁾

Prologues and epilogues were fashionable compositions, often unrelated to the subject matter of the plays which they advertised, and an added source of income to their authors.⁽³⁶⁾

1つ目はスウィフトの作品からの引用で、「ドライデンの前書き」(“the *Prefaces of Dryden*”)が「1冊の単価を1シリング引き上げるために / 元々は埋め草として書かれたに過ぎない」(“meerly writ at first for filling / To raise the Volume's Price, a Shilling.”)ことが、ややおどけた調子で謳われている。また2つ目は当時の出版事情について解説したものだが、やはり芝居に付けられたプロローグやエピローグが、主題に関係なく、単に作者の実入りをよくするためのものであることが述べられている。

そしてよく知られているように『ダンシアッド』には、この手の附録資料が

膨大な量付されているのである。本論でも取り上げたテキストに付された冗長な注釈や、延々と続く「作家たちの証言」、あるいは「桂冠詩人について」などはその一部である。そうした膨大な附録資料故に『ダンシアッド』は、ポウプの標準的な全集であるトゥイックナム版（11巻から成る）の中で最も大部な巻となっている。つまり『ダンシアッド』という作品は、内容のみならず、1冊の書物としても三文文士の作品の擬態となっているのである。

終章

以上、定期刊行物の会話調の文体と、締め切りが短い間隔で次々とやって来るという特殊な出版形態、この二つが、ポウプをして定期刊行物と三文文士を結びつけさせた要因であることを論じてきた。第2章で述べたように、『ダンシアッド』には定期刊行物や会話文化に対する揶揄が頻出しているのであるが、その背景にはコーヒーハウスを中心に花開いた白熱した会話文化や、出版業界における経済上の慣行など意外な要因が垣間見られるのである。

最後に蛇足めいたことを述べておく。

たとえば、ケータイメールは書かれた文書でありながら、日常会話での普通のしゃべりかたに基礎を置く、「言文一致」ならぬ「言文一緒」ともいうべき軽い文体が基本となっている。そして、書き手の意識もまた「書いている」ではなく「話している」に近い〔三宅和子2005：147〕⁽³⁷⁾という。

つまり現代人にとってはソーシャルメディアに書き込むという行為は、話すという感覚で捉えられているのであり、当然その文体は砕けた調子、おしゃべり口調となる。つまり第1章の引用でスティールが「日常会話のような口調で書く」（“writing in an Air of Common Speech”）と述べていたのと同じ現象である。同じく第1章で『タトラー』の二番煎じとして18世紀に「さきやく人」「ぶつぶつ言う人」「べちゃくちゃしゃべる人」という名の定期刊行物が次々と出版されたことに触れたが、21世紀の今日、やはり平易なしゃべり口調で圧倒的な情報伝達能力を誇り、世間を席卷しているメディアは「つぶやく人」すなわち「ツイッター」である。300年の時を越えて『タトラー』と「ツイッター」が共に「しゃべる、つぶやく」つまり「話す」という行為からその名を付けられたことは偶然の一致ではない。そしてその結果、シオボルドの言葉を手がかりに確認した「メディアが、作家としての資質がなくても、誰でも

気軽に書くことができる開かれた場を提供する」という現象もやはり同じように今日発生している。すなわち、携帯小説である。またそれほど大仰でなくても、自分のブログやホームページに詩や小説を発表する人もいる。そうした素人が一人前のプロの作家気取りでいるのに、苛立ちを覚える本物のプロの作家もいることであろう。300年前のポープがそうであったように。あるいはソーシャルメディアに溢れるしゃべり言葉、会話口調、乱れた日本語に眉を顰める人も大勢いるであろう。こう考えると、往時ポープの感じた苛立ちは、意外と身近なものなのかもしれない。

Bibliography

1. Primary Sources

Bond, Donald F, ed. *The Spectator*. 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1965.

-----, ed. *The Tatler*. 3 vols. Oxford: Clarendon Press, 1987.

Boswell, James. *The Life of Johnson Together with Boswell's Journal of a Tour to the Hebrides and Johnson's Diary of a Journey into North Wales*. Edited by George Birkbeck Hill. 6 vols. Oxford: Clarendon Press, 1934-64.

Gay, John. "The Present State of Wit." In vol. 2 of *Poetry and Prose*, edited by Vinton A. Dearing. 2 vols. 449-56. Oxford: Clarendon Press, 1974.

Johnson, Samuel. *The Idler and The Adventurer*. Vol. 2 of *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, edited by W. J. Bate, John M. Bullitt, and L. F. Powell. New Haven: Yale UP, 1963.

-----, *The Letters of Samuel Johnson*. Edited by Bruce Redford. 5 vols. Princeton: Princeton University Press, 1992-94.

-----, *The Lives of the Most Eminent English Poets*. Edited by Roger Lonsdale. 4 vols. Oxford: Clarendon Press, 2006.

-----, *The Oxford Authors: Samuel Johnson*. Edited by Donald Greene. Oxford and New York: Oxford University Press, 1984.

-----, *The Rambler*. Vols. 3-5 of *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson*, edited by W. J. Bate and Albrecht B. Strauss. New Haven: Yale University Press, 1969.

Mist, Nathaniel. *A Collection of Miscellany Letters, Selected out of Mist's Weekly Journal*. 4 vols. London: Printed for T. Warner, 1722-27.

Pope, Alexander. *The Dunciad*. Edited by James Sutherland. Vol. 5 of *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, edited by John Butt. London: Methuen, 1953.

-----, *The Dunciad in Four Books*. Edited by Valerie Rumbold. New York: Longman, 1999.

- Stephens, John Calhoun, ed. *The Guardian*. Lexington: University Press of Kentucky, 1982.
- Swift, Jonathan. *The Poems of Jonathan Swift*. Edited by Harold Williams. 3 vols. Oxford: Clarendon Press, 1958.
- Theobald, Lewis, ed., *The Censor*. 3 vols. London: Printed for Jonas Brown, 1717.

2. Secondary Sources

- Altick, Richard D. *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public 1800-1900*. Chicago and London: U of Chicago P, 1957.
- Barker, Hannah. *Newspapers, Politics and English Society 1695-1855*. Essex: Longman, 2000.
- Black, Jeremy. *The English Press in the Eighteenth Century*. London: Croom Helm, 1987.
- Bond, Richmond P. *Growth and Change in the Early English Press*. Lawrence: University of Kansas Libraries, 1969.
- Boulton, James T, ed. *Johnson: Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Burrowes, Robert. "Essays on the Stile of Doctor Samuel Johnson, No. I." In *The Transactions of the Royal Irish Academy, Polite Literature*, 27-40. Dublin, 1787.
- Chalmers, Alexander. Preface to *The Rambler*. In vol.19 of *The British Essayists*, edited by Alexander Chalmers. 45 vols. London, 1802.
- Cowan, Brian. "Mr. Spectator and the Coffeehouse Public Sphere." *Eighteenth-Century Studies*, vol. 37, No. 3, edited by Bernadette Fort. 345-66. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2004.
- DeMaria, Robert, Jr., "The Eighteenth-century Periodical Essay." In *The Cambridge History of English Literature, 1660-1780*, edited by John Richetti, 527-48. Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- Drake, Nathan. *Essays, Biographical, Critical, and Historical, Illustrative of the Rambler, Adventurer, and Idler, and of the Various Periodical Papers*. 2 vols. London, 1809-10.
- Italia, Iona. *The Rise of Literary Journalism in the Eighteenth Century*. Abingdon: Routledge, 2005.
- Kernan, Alvin. *Samuel Johnson and the Impact of Print*. Princeton: Princeton UP, 1987.
- Lynch, Kathleen M. *Jacob Tonson, Kit-Cat Publisher*. Knoxville: U of Tennessee P, 1971.
- Milic, Louis T. "Tone in Steele's 'Tatler.'" In *Newsletters to Newspapers:*

- Eighteenth-Century Journalism*, edited by Donovan H. Bond and W. Reynolds McLeod. 33-45. Morgantown: West Virginia University, 1977.
- Parke, Catherine N. "Johnson and the Arts of Conversation." In *The Cambridge Companion to Samuel Johnson*, edited by Greg Clingham, 18-33. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- Parsons, Nicola. *Reading Gossip in Early Eighteenth-Century England*. London: Palgrave Macmillan, 2009.
- Piozzi, Hester Lynch. *Anecdotes of the Late Samuel Johnson*, LL.D. 1786. Reprint, New York: Garland Publishing, 1974.
- Porter, Roy. *Enlightenment*. London: Penguin Books, 2000.
- Rogers, Pat. *Grub Street*. London: Methuen, 1972.
- Sutherland, James. *The Restoration Newspaper and its Development*. Cambridge: Cambridge UP, 1986.
- Walpole, Horace. "General Criticism on Dr. Johnson's Writings." In vol.4 of *The Works of Horatio Walpole*. 5 vols. 361-62. London, 1798.
- 小林恭子 『英国メディア史』中公選書, 2011年
- 佐藤健二 『ケータイ化する日本語モバイル時代の“感じる”“伝える”“考える”』大修館書店, 2012年
- 芝田正夫 『新聞の社会史—イギリス初期新聞史研究—』晃洋書房, 2000年

註

- (1) Pat Rogers, *Grub Street*. (London: Methuen, 1972), 21.
- (2) 例えば Jeremy Black, *The English Press in the Eighteenth Century* (London: Croom Helm, 1987), 12-13.
- (3) Roy Porter, *Enlightenment* (London: Penguin Books, 2000), 82.
- (4) OED "hack"(sb.³) 4-a の定義。ちなみに次に古い用例としてゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1728-74) が書いた *Epitaph on Edward Purdon* が引かれているが、そこで「書籍商に仕える三文文士」("a bookseller's hack"(2)) と呼ばれているパードン(Edward Purdon, 1729-67) もまた、ゴールドスミスと協力して、*The Busy Body* という定期刊行物の編集に携わった人物であった。
- (5) 『タトラー』という名称について、スティールは第1号において女性に敬意を表して付けた旨の発言をしている。後に触れるように、当時女性の識字率が低かったという事情もあり、おしゃべりは女性の特権と見なされる傾向があった。例えば、火木土に発行された『タトラー』を補完する形で、同時期の月水金に出た *The Female Tatler* の第1号冒頭でも、架空の語り手 Mrs. Crackenthorpe は「おしゃべりはこれまでずっと女性に特有のものと見なされてきた」("...tattling was ever adjudg'd peculiar to our sex;...")と述べている (Delarivier Manley, *The Female Tatler*, ed. Fidelis Morgan (London: J. M. Dent and Sons, 1992), 1) し、シオボルドが編集した新聞 *The Censor* の53号には「自然は(女性に)止めどなく流れ出る饒舌を授けた」("...Nature has endu'd 'em(=

Female World) with that ever-flowing Stream of Eloquence,...”)とある。『セ
ンサー』のテキストは Lewis Theobald, ed. *The Censor*. 3 vols. (London:
Printed for Jonas Brown, 1717)による。またポウプは『髪略奪』(*The Rape
of the Lock*)の巻頭に付した“To Mrs. Arabella Fermor”という散文におい
て、女性たちに作品を理解して貰うために、そこで用いられた難解な用語を説明
する許可を求めている。こうしたことから、おしゃべり口調とは、難解な語彙
の回避を主な要件としていたことが示唆されている。この点はジョンソンの手が
けた定期刊行物との比較において後述する。

- (6) Donald F. Bond, ed., *The Tatler*, 3 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1987),
1: 51. 以下『タトラー』からの引用については、全てこの版による。
- (7) *Tatler*, 3: 87.
- (8) John Gay, “The Present State of Wit,” in *Poetry and Prose*, ed. Vinton
A. Dearing 2 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1974), 2: 451.
- (9) 実はポウプ自身『スペクテーター』457号で『内緒話のニューズレター』
(*News-Letter of Whispers*)という定期刊行物の発刊を提案している。内容は
「高位の人々の病気、大臣が夜陰に紛れて訪問したりされたりすること、秘密の
求愛と結婚、密かな情事、賭け事での大負け…」(“Sickness of Persons in high
Posts, Twilight Visits paid and received by Ministers of State, Clandestine
Courtships and Marriages, Secret Amours, Losses at Play,...”)(Donald F.
Bond, ed., *The Spectator*. 5 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1965), 4: 112.
以下『スペクテーター』からの引用については、全てこの版による)といったも
ので、明らかに定期刊行物の覗き見趣味、低俗さを茶化したものであるが、留意
すべきはその呼び名に、やはり「内緒話」(“Whispers”)というおしゃべり口調
を予感させる言葉が使われている点である。同じ号でポウプはコーヒーハウスで、
この種のゴシップが口伝えで人々の間に広まっていく仕組みを解説しており、彼
の茶化しの意図は、既にその呼び名に現れていると言えるだろう。
- (10) *Tatler*, 3: 174, 251.
- (11) *Ibid.*, 1: 15.
- (12) Richard D. Altick, *The English Common Reader: A Social History of the
Mass Reading Public 1800-1900* (Chicago and London: U of Chicago P,
1957), 35. 及び、小林恭子『英国メディア史』(中公選書, 2011年) 64-65頁。
- (13) 『スペクテーター』第10号において。
- (14) Iona Italia, *The Rise of Literary Journalism in the Eighteenth Century*
(Abingdon: Routledge, 2005), 10.
- (15) James Sutherland, *The Restoration Newspaper and its Development* (Cam-
bridge: Cambridge UP, 1986), 228-29. アディソンもまた『スペクテーター』
445号において、スタンプ法の制定と並んで、「迫り来る和平」(“an approach-
ing Peace”)が新聞の売り上げに及ぼす深刻な影響に言及している。(*Spectator*,
4: 62-63.)
- (16) 『ダンシアッド』のテキストは全て James Sutherland, ed., *The Dunciad*.

Vol. 5 of *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, gen. ed. John Butt 11 vols. (London and New Haven: Methuen and Yale UP, 1939-69) (以下 *TE* と略記する) に収められた、1743年に出た 4 巻本 (*The Dunciad* (B)) による。

- (17) 例えば第 1 巻215-6行, 第 2 巻149行, 258行, 306-7行, 314行, 第 3 巻146行及び199行目に付された擬注において。加えてポウプは、定期刊行物の誌上で、『ダンシアッド』の愚物たちからひどい非難, 中傷を受けていた。おそらくこのことも、彼が定期刊行物に含むところがあつた理由であろう。ポウプは『ダンシアッド』の附録記事 “A List of Books, Papers, and Verses...” において自分を中傷した定期刊行物の一覧を載せている。
- (18) John Calhoun Stephens, ed., *The Guardian* (Kentucky: UP of Kentucky, 1982), 349.
- (19) Letter LXXII in the *Collection of Miscellany Letters, Selected out of Mist's Weekly Journal*, 4 vols. (London: Printed for T. Warner, 1722-27), 2: 257.
- (20) Marshall McLuhan, *Understanding Media: The Extensions of Man* (London and New York: Routledge, 1964), 7-23.
- (21) *TE*, 5: 25-26.
- (22) Norman Ault and Rosemary Cowler, eds., *The Prose Works of Alexander Pope* 2 vols. (Oxford: Blackwell; Hamden: Archon Books, 1936-86), 2: 220.
- (23) Archibald Campbell, *Lexiphanes, a Dialogue* (London; Printed for J. Knox, 1767), 6-7.
- (24) Robert Burrowes, “Essays on the Stile of Doctor Samuel Johnson, No. I.” *The Transactions of the Royal Irish Academy, Polite Literature*. (Dublin: Printed by Luke White, 1787), 32-33.
- (25) W. J. Bate, John M. Bullitt, and L. F. Powell, eds., *The Idler and The Adventurer*. Vol. 2 of *The Yale Edition of the Works of Samuel Johnson* (New Haven and London: Yale UP, 1963), 217-18.
- (26) Samuel Johnson, “Life of Addison,” in *The Lives of the Most Eminent English Poets; With Critical Observations on Their Works*, ed. Roger Lonsdale 4 vols. (Oxford: Clarendon Press, 2006), 3: 38.
- (27) Johnson, “Life of Addison,” *Lives*, 3: 37.
- (28) Nathan Drake, *Essays, Biographical, Critical, and Historical, Illustrative of the Rambler, Adventurer, and Idler, and of the Various Periodical Papers*, 2 vols. (London: Printed for W. Suttaby, 1809-10), 1: 198.
- (29) Burrowes, *The Transactions of the Royal Irish Academy, Polite Literature*, 30.
- (30) *Censor*, 3: 245.
- (31) この点については『タトラー』以外に、例えば『センサー』52号において “modesty” と “impudence” についての記事の後, 唐突に末尾で “From my

own Apartment”という見出しを付して、自分の書いた芝居を売り込みに来た紳士についての短い記事が添えられているし、88号ではシドニー（Sir Philip Sidney, 1554-86）とティブルス（Albius Tibullus, c.55BC-c.19BC）からの引用が誌面の大半を占めている。これらも埋め草とみなしてよいであろう。

- (32) *TE*, 5: 416.
- (33) Anonymous, *The Egotist: or, Colley upon Cibber* (1743; New York and London: Garland Publishing, 1975), 49.
- (34) Johnson, “Life of Pope,” *Lives*, 4: 63.
- (35) テキストは Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift*, 3 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1958) による。
- (36) Kathleen M. Lynch, *Jacob Tonson: Kit-Cat Publisher* (Knoxville: U of Tennessee P, 1971), 151.
- (37) 佐藤健二『ケータイ化する日本語 モバイル時代の“感じる”“伝える”“考える”』（大修館書店, 2012年）, 222頁。

キーワード アレグザンダー・ポープ 『ダンシアッド』 初期定期刊行物
サミュエル・ジョンソン 三文文士